

**【報告書】****オンデマンド海外英語研修の試み\***

吉村紀子・澤崎宏一・寺尾 康・中山峰治

## はじめに

本稿は、静岡県立大学国際関係学部と米国オハイオ州立大学日本研究所の国際協定に基づき2003年から始まった「静岡夏期英語研修プログラム」(Shizuoka Summer English Program、以下SSEPと略称)が2005年夏の実施を以って3年目の節目を無事終了することができたことを受け、これまでの歩みと成果をまとめたものである。以下では、SSEPの今後のさらなる発展を視野に入れながら、参加学生と私たち担当者の過去3年間の活動と取り組みを具体的に遡ってみたい。

## 1. 研修プログラムの概略と特色

SSEPは、日本のほとんどの大学で利用している既製語学研修—研修先に単に学生を送り込む、お任せの“レディーメイドプログラム”—と異なり、参加する静岡県立大学国際関係学部の学生の英語学習と異文化体験のニーズに出来る限り対応できるよう企画した、オンデマンド方式の、いわば“オーダーメイドプログラム”である。この研修企画を立案する際、類似したものが国内ではなかったため、全く手探りの状態から開始することになった。特に研修内容、つまり「何に重点を置き、どのように学習指導するのか」という課題に最も留意した。端的に言うと、SSEPの目標を学生に最も必要な英語力、すなわちアカデミックコミュニケーション能力の養成に絞ること

---

\* 本稿は、平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)研究課題番号17520387 研究代表者 吉村紀子)に基づく研究成果の一部である。

とした。そして研修の成果—具体的には、参加した学生が英語のどのスキルにおいてどの程度向上したのか—について適切に調査できるようなプログラムにしたいと考えた。

SSEPの第一の特色は、教室での授業形態にある。SSEPでは、アカデミックコミュニケーション能力の養成という観点から、文型練習や英会話用のテキストを使用せず、ディスカッション・オーラルプレゼンテーション・カレッジレクチャーを授業の軸とし、活発なイントラアクションを目指すこととした。実際の授業は、参加学生が研修の到達目標をクラスにおいて発表することから始まる。また授業の初めに、学生一人ひとりが3週間で完成可能な研究プロジェクトを考えるように指導される。

例えば、ディスカッションは前日に配布されるプリントのトピックを中心に展開し、参加学生は知らない単語を調べたり、資料を読んだり、という予習が必要となる。トピックとして、これまで「日米の家族構成」・「アメリカの教育システム」・「ボランティア精神」・「アメリカにおける日本事情」等が採り上げられている。参加学生の多くは内容を理解するのに図書館やインターネットで資料検索し、教室では講師からの指示やヒントを手がかりにディスカッションに展開していくことになる。オーラルプレゼンテーションでは、以下に説明するリサーチプロジェクトの成果を口頭発表することが中心となる。リサーチプロジェクトのトピックは学生の自由選択課題であるため、オハイオ州立大学の担当教員が文献や資料の調査を段階的に指導している。さらに、「アカデミックに英語学習すること」の意味とその目標を参加学生に理解してもらうために、オハイオ州立大学側の担当者に依頼して毎年2つから3つのカレッジレクチャーを開催している。採り上げるトピックについては両校間で事前に相談した上で決定しているが、例えば、昨年度は大統領選挙があったので、アメリカの選挙制度についてのレクチャーをおこなった。

SSEPの第二の特徴として、教室外の学習活動として企画しているボランティア体験・Passport to Japan・ホームステイがある。ボランティア体験では、学生たちは「ボランティアとは何か」というレクチャーを聞いた後、半日のボランティア活動をするため、コロンバス市内にあるロナルド・マクドナルドハウス<sup>1)</sup>に出かけて行き、グループ別に室内の清掃をおこなう。Passport to Japanは、近くの幼稚園に通う園児や、日本研究所のホームページにて募った小学生をオハイオ州立大学のキャンパスに招待して、日本文化を紹介するという活動である。参加学生は4から5グループに

1) Ronald McDonald House.長期入院中の子供の家族が滞在できる施設-a home-away-from-home.

## 報告書

分かれて、当日子供たちが折り紙・剣道・習字・おにぎり等の体験学習ができるように準備をし、また子供たちが内容を間違いなく理解できるように英語の説明を予行練習していく。ホームステイは第1週目と第2週目の週末を利用して実施されることになる。金曜夕方にホストファミリーが学生を寮に迎えに来て、日曜日夕方に寮まで送ってくる、というシステムである。ホストファミリーは日本研究所のホームページの公募に応じて参加する家族である。彼らの好意により、学生たちは実際のアメリカ家庭生活を体験する貴重な機会を得ている。

SSEPの第三の特徴は、学生の“英会話”向上のために、インフォーマルな英語を練習できるように企画したconversation partnerとresidence assistanceという制度である。conversation partnerの詳細は後述に譲ることにし、residence assistanceについて説明すると、この制度は学生の寮生活の向上と異文化生活上の問題・悩みへの対応という目的で、ネイティブスピーカーの人に平日の夕方6時から朝8時まで同じ寮の同じ階に滞在してもらうものである。参加者の半分以上が女性である点を考えて、女性のオハイオ州立大学スタッフを例年雇用している。

この制度を実施する上で現地の事務局に感謝している点は、学生が困った時（寮の電話やコインランドリーの使い方・薬・買い物など）ばかりでなく、時間がある時はresidence assistantの所に行って、いろいろな雑談を通してインフォーマルな英語コミュニケーションの練習ができるようさまざまなきっかけを作ってもらったことである。例えば、炊飯器とお米を事務局からの計らいで彼女の部屋に準備してもらったこともある。毎晩、誰か、あるいは何人かのグループで、residence assistantの所に遊びに行って話しをしていたと聞いている。

## 2. 3年間の歩み

ここでは、SSEPの3年間（2003年～2005年）の実施状況について、運営・実施を直接担当するオハイオ州立大学日本研究所の事務局からの報告である。

2003年、最初の年、2003年は参加学生15名という大所帯であった。日本からオハイオ州コロンバス市には直行便はなく、アメリカ国内で飛行機を乗り継がなければならないが、日本からの出発便に大幅な遅れが出たこと、あるいは乗り継ぎに十分な時間

- 
- 2) この問題は学生の責任ではなく、航空券を購入した旅行会社の知識不足で生じたようである。多くの場合、アメリカ国内の乗継時間が90分ぐらしか取っておらず、不十分であった。次年度からはオリエンテーションの時にこの乗り継ぎ時間に十分注意するように学生に伝えた。

がなかったことから、参加学生のほとんどが夜遅くコロンバス空港に到着した<sup>2)</sup>。そのため、担当スタッフが学生の到着を待って夜遅くまで空港に待機していたり<sup>3)</sup>、寮のチェックイン<sup>4)</sup>が深夜になったり、プログラム開始前日から事務所は大変だった。プログラム期間中に滞在したキャンパスの寮は、この年は申し込みが遅れたため当初予定していた所が確保できず<sup>5)</sup>、トイレ・シャワーがフロア共用の学生寮で、参加者から不便であるという不満があった。さらに別な問題として、ホームステイ先を決める時、静岡で学生に実施したアンケート項目、例えば「食事制限」・「アレルギー」・「ペット不可」等を参考にしたのであるが、アレルギーを持つ2人の学生がアンケートにそのように申告しなかったため、ホームステイ先を急遽変更しなければならないという事態も発生した。

次に、研修を進めて行く上で、15名の参加者の中に大学院生が3名含まれていたのは非常に有益な点であった。授業はもちろんのこと、日常生活の中でも彼らがリーダーシップを取って学部生に刺激を与えていた。参加者の英語力について、15名は中級から上級までと習熟度に差があった。中級の下の子生2～3人はテキストを使用する授業の方が効果的であると考えられるレベル、つまりディスカッションなどで自由に発言できるようなレベルではなかった。このような学習上の不適切さは学生にとっても、また研修内容の展開から考えても、好ましいものではなかったため、今後の検討課題として指摘された。授業では、多くの学生が前半は静かに、おとなしくすわっているだけであったが、後半になると、少しずつ元気になり、クラスで発言をするようになった。日常生活では、多くの学生が実家を離れて自分ひとりで生活することに慣れていなかったためか、また初めて来た異国・異文化で、自分の想像と異なる世界のためか、慣れるまでいろいろと苦労したようである。

2004年、参加学生は9名であった。まず、前年度の経験を生かし、静岡でのガイダンス(2回実施)にてなるべく具体的な内容を説明した。この事前準備により、参加申込書(application form)に記載する「参加の目的」・「英語力」・「何に興味があるのか」などについてより詳細に書かれていたので、ゲストレクチャーの内容、授業のレベル、ホームステイ先の選択等を決める際に役に立った。ただ、飛行機の乗り継ぎに関しては前年度のことがあまり生かされず、数名の学生が遅れて到着した。また、

3) 学生の一人がテキサス州ダラス空港から事前に渡しておいたプログラム担当副責任者の携帯電話の番号に電話をかけ、到着が遅れることを英語で知らせて来たことはよかった。

4) キャンパス内の学生寮はフロントデスクが24時間開いているので、いつでもチェックイン可能である。

5) SSEPに関する協定に正式合意したのが2003年6月であったので、寮の仮申し込みができなかった。

## 報告書

2人の学生の荷物が遅れて翌日寮に到着するというハプニングもあった。この年に滞在した寮は、前年度と異なり、トイレ・シャワー付きのスイートルーム（2人部屋）であったので、快適に過ごせたようである。ただ、寮が授業のある建物から遠く（歩いて10分弱）になったこともあり、遅刻する学生が出た。ホームステイ先については、事前に必要な情報が学生から事務局に届いていたので、非常にスムーズに決定することができた。

参加者の英語力は、前年度と同じく、中級から上級までと習熟度に違いがあったが、前年度の参加者と異なる点は、学生一人ひとりがこの機会を利用してなるべく多く英語を話そうとしていたことである。このような積極的な学習姿勢は教室外の生活においても継続していたようで、“英語使用”のルールを全員で決めて実行していた。また、グループのまとまりがよく、誰かのconversation partnerが夕食後寮に来る時には全員に声をかけて集まり、パーティーをしたり、楽しく英語の勉強をしたり、有意義に時間を過ごしていた。この年の参加学生は英語を話そうとする意欲が高く、チャレンジ精神も旺盛で、conversation partnerやその友達とともに毎日いろいろな活動をし、オハイオでの生活を満喫したようだった。

2005年、参加者は13名であった。これまでと違い、その中、12名は一、二年生であった。日本の就職活動の時期を考えると、これからの参加者は学年的にこのような傾向になるのではないかと思われる。ほとんどの学生が自宅から県立大学に通う生活であるため、オハイオでの生活が初めて親元を離れた生活であった。参加者に聞いてみたところ、一番大変だったのは食べ物で、なかなかアメリカの食べ物には苦労したようである。コロンバスには日本のものがたくさんあるのに、それでも大変だったということは、よい異文化体験になったのではないだろうか。

参加者の英語力は、13名中、2名が初級の上、7名が中級の上、そして4名が海外生活経験者で上級レベルであった。上級の2名は小中学校の何年かをアメリカで生活していた帰国子女であった。クラスの中に4名の上級者がいたことは他の参加者にとってよい刺激であり、また目指す目標モデルとなっていた。しかしながら、1週目の授業は時差もあり、生活に慣れるのに精一杯で心身ともに余裕がなかったためか、多くの場合、質問等の発言もせず、黙って聞くだけの態度であった。SSEPの目的—アカデミックコミュニケーション能力の向上—を考えると、英語圏では“授業中に発言すること”が意欲とか積極性を示す上で重要であることを教師に指摘してもらった。2週目に入ると、時差も取れ、生活にも慣れてきたので、上級レベルの学生が質問やコメントを授業中するようになり、それに刺激されたかのように、他の学生も発言する機

会が増えてきた。例えば、「ボランティアとソーシャルワーク」のゲストレクチャーの時は質問が数多く出て、招待講師は講演を終えるのに予定より30分も時間を延長する、というハプニングがあった。3週目におこなったリサーチプロジェクトのプレゼンテーションは非常に質の高いものであった。

このように、SSEPは2003年に立案・企画した時に目標であった、「オーラルコミュニケーションの集中トレーニングを通して、英語で意見やコメントを述べる、研究結果を英語でプレゼンテーションする、英語圏のコミュニティーに飛び出して異文化体験をする」という活動を重視する実践プログラムに成長しつつある。学生たちに望みたいことは、このSSEP海外研修体験を、アカデミックコミュニケーション力の向上を図りながらグローバルな視点を養うための大きなステップとして活用してもらいたいということである。そのためには、静岡県立大学としてはSSEPに続く次のステップをどのような内容で、どのようにして提供できるかを考えなければならない。

### 3. ゲストレクチャー

毎年、参加学生に「アメリカの大学講義」を模擬体験してもらうため、また同時に「英語の講義を聴講するのに何が不足しているのか」を実感し今後の英語学習へのよい刺激となるように、オハイオ州立大学の先生やコロンバス市在住の専門家を招いて2つから3つのゲストレクチャーを開催している。日本の新学期が始まる頃、その年のトピックや担当者の選定について両者間で話し合いを始めるが、選考基準は特になく、静岡サイドからの要望—例えばグローバルの話題やアメリカの時事問題、あるいは日米の社会問題—に配慮して決定している。ここでは、過去3年間に実施した、主なレクチャーについて一見し、学生がどのようなレクチャーを聴講するのかを紹介することにしよう。

2003年、第一回目のレクチャーは「オハイオ州立大学の外国語教育」（講師：オハイオ州立大学東アジア言語文学学部 Charles Quinn, Jr. 準教授）であった。講義の内容は、アメリカ国内およびオハイオ州立大学での外国語教育において、日本語教育がどのように位置づけられているのかという現状分析から始まり、オハイオ州立大学での日本語教育の内容や具体的なカリキュラム等であった。ほとんどの学生にとって、日本語や日本語教育についてこれまであまり考えたことがないこと、その上、英語のレクチャーは今回が初めてであったこと、などから積極的に講義に参加しようとする姿勢があまり見られなかった。しかし、レクチャー後、内容をどのくらい理解できた

## 報告書

のか質問してみたところ、ほとんどの学生が「半分くらい」と答えたのは少し安心できる結果であった。

第二回目のレクチャーは「アメリカの教育システム」(講師：オハイオ州立大学東アジア言語文学学部中山峰治準教授)であった。前回の「参加者が黙って聞く」というようなことがないように、講師の提案により、レクチャーに入る前に簡単なブレインストーミングをおこなった。具体的には、オハイオ州立大学のホームページから短い広報記事のコピーを教室で配布し、読んでその内容をまとめるという活動をおこなった。しかしながら、講師がいろいろと質問をしても、ほとんどの参加者が答えられなかった。その「沈黙」の原因として、トピックに興味がないのか、講義内容がよく理解できなかったのか、あるいはその場で考えて意見を言うのが難しかったのか、という3つが考えられたが、講師は「英語で意見を言うこと」の難しさが一番の原因であろうと言っていた。

2004年、第一回目に行われたレクチャーは、アメリカ合衆国の大統領選挙に関する講義であった(講師：JUST Institute プログラム責任者 Ray Irwin氏)<sup>6)</sup>。ちょうどこの年が大統領選挙の年であり、秋の投票を目前に控え、ブッシュ、ケリー両陣営の運動が白熱していく中、時期的にも大変タイムリーなトピックが選ばれた。講義の内容は、大統領選挙のしくみや候補者についての話から、政党、大統領選挙人、“Swing States”と呼ばれる接戦が予想される州の説明や、さらには実際にどのような選挙活動が地元では繰り広げられているか等にいたるまで、多岐にわたるものであった。学生達は、事前に資料が配られていたが、予習が不十分だったためか詳細まで理解することは難しかったようだ。その一方で、レクチャーの内容に興味を示し、簡単な質問がいくつかなされるなど、限られた語学力の中で講義に参加しようとする姿勢も見られた。短いながらも学生からの自発的な発言が見られた点で、前年度に比べて若干の進歩があったと言える。

2005年、第二回目に行われたレクチャーは、“US Social Work”(講師：オハイオ州立大学社会学部 Pamela Richmond助教授)についての講義で、これは参加学生が最も関心を示し、積極的に参加した企画であった<sup>7)</sup>。講義の前半は、まず、アメリカではボランティア、ヘルパー、ソーシャルワーカー、のように三者間にはっきり

6) 第二回目のレクチャーは、アメリカにおけるソーシャル・ワーク(2005年と同じ)をトピックに行われた。

7) 第一回目のレクチャーは「オハイオ州進出の日本企業」について外部の企業から講師を招待しておこなったが、内容はインターネットで調べればわかるものばかり、という参加者からの声があったりと、不評であった。両校の担当者として、ゲストレクチャーのトピック選定の難しさを改めて感じた。

とした区別があること、アメリカでソーシャルワーカーの資格を得るためには大学卒、できれば大学院修士課程修了が望ましいこと、それから、アメリカにおけるソーシャルワーカーの仕事は対象となるのがコミュニティー、グループ・組織、個人であるかによって、“ミクロ”・“メゾ”・“マクロ”という専門分野に区別されていること、等の説明があった。後半は、ケーススタディーとして、今夏福岡で起こった少年事件に関するジャパンタイムズの記事を探り上げて、ソーシャルワーカーとして何をどのように理解し、誰に対してどのように対応して行くのか、という点についてクラスでディスカッションしていく形式が取られた。

上級レベルの学生が数名いたこと、ソーシャルワーカーという職業に関心が高かったこと、そしてアメリカでのソーシャルワーカーが非常に専門性の高い職業であること、などから、講義の中で質量ともにいろいろな質問が参加学生から出て、前述にあるように、講義の時間が足りなくなってしまう、という状況であった。このことは、英語や異文化の学習面から考えると、英語で質問することがそんなに難しく怖いことではないこと、講義中であっても理解できないことがあったらその時点で質問すること、発言することが授業への積極的な参加を示すこと、等を実際に体験できた点で有意義であった。

#### 4. リサーチプロジェクト

アカデミックコミュニケーション能力の養成を目指すSSEPは、参加学生が各自のテーマについて資料収集・調査をおこない、その成果をオーラルプレゼンテーションする学習、「リサーチプロジェクト」を重視している。この企画の具体的な進め方は次の通りである。

まず、研修開始時のオリエンテーションにて、プロジェクトのテーマを決定し、その要点と問題に対するアプローチの仕方などをまとめて第1週目の金曜日にクラスにて提出するように学生たちは指導される。その際、プロジェクトあるいはテーマについて質問がある学生はこの企画の責任者(中山)と面談することになる。第2週目の月曜日に、学生たちにコメント・助言付きの企画案が返却される。それ以後、平日の午後や週末を利用して、学生たちはコメントや助言に沿ってプロジェクトを実施する

8) 実際、ほとんどの学生が担当者と個人面談をおこなっていた。また、何人かの学生はconversation partnerの協力を得てアンケート調査やインタビューを実施できたと聞いている。



## 報告書

ことになるが、質問や相談がある場合にはいつでもアポイントメントを取って担当者から助言をもらうことができる<sup>8)</sup>。学生たちは図書館に行って資料を集めたり、コミュニティに出かけて行ってインタビューしたり、キャンパスでアンケート調査をおこなったり、いろいろな研究アプローチを経験できる。そして、プロジェクトの仕上げとして、第3週目の金曜日に一人10分のオーラルプレゼンテーションをクラスで実施することになる。この時、必要であれば、オーディオ機器やOHPを使用できる。以下はリサーチプロジェクトを直接指導した中山の報告である。

第一の印象は、このリサーチプロジェクトが参加学生全員にとって大きなチャレンジとなったことである。これは、彼らが英語では全く、日本語でもほとんど、このような学習体験をこれまでに起こったことがなかったためであるが、特に、収集した資料やデータを整理して議論を展開していくということを実際に実行するのが困難であった。第二の印象は、日本語でも研究レポートをほとんど実践したことがなかったためか、学生たちが各自で選択したトピックのほとんどが具体的ではなく、あいまいな、漠然としたものだったことである。その結果、助言にしたがってリサーチを進めるうちにプロジェクトのテーマを変更する学生も出た。第三の印象として、アカデミックライティングの指導の必要性を感じたことが挙げられる。英語で要点を整理して論理的にまとめることは日本の学生にとってむずかしい作業であろうが、日本の授業の中で英語のレポートによく使用される文型・表現方法・単語がある程度学習できていれば、もう少しプロジェクトの内容を深めることに力を注ぐことができたかもしれない。それから、学生は一人の持ち時間—発表10分・質問5分—でプレゼンテーションすることの難しさを実感していたようである。発表を限られた時間内に終わらせようと、学生たちは寮で何回も練習していた。

リサーチトピックの具体例を今年のものから紹介すると<sup>9)</sup>、例えば、「英語のあいさつ」、「アメリカの日本語クラスと日本の英語クラスの比較」、「アメリカのユーモア」等の言葉に関する問題や、「アメリカのスポーツ」、「空手」、「アメリカ人はサッカーについてどう思うか」などというスポーツに関するテーマ、「アメリカの緑茶」という静岡に関連する地域トピック、それから「マクドナルドの日米比較」、「女性雑誌の歴史」、「アメリカにおける日本の漫画」、「ODA日米比較」などがあった。また、アメリカではよく国旗を見かけるので「国旗」について意見を聞いてまとめた学生もい

9) 前述したように、参加者の英語力が高かったこともプラス要因となり、2005年は質の高いプロジェクトが多かった。

た。そして「ウォールマートとターゲット：日本ではどちらが成功するか」という研究では、ウォールマートはドンキホーテ消費者に受け、ターゲットは無印良品消費者に受けるであろうという分析を提示した学生もいた<sup>10)</sup>。

このように、トピックは多様であるが、各自の関心のあるテーマであるので、3週間という限られた期間内に、例えば、conversation partnerやホームステイの家族や友人をインタビューしてデータをまとめたり、実際に現場を訪れて自分の目で見て分析したりするなど、綿密なリサーチをおこなってまとめることができたと思う。つまり、英語を使用してリサーチからプレゼンテーションへ至る、このリサーチプロジェクトは効果的なアカデミックコミュニケーション学習活動である。今後は、パワーポイントを使用しての発表や、ハンドアウトと聞き手を見ながらの発表など、もう一段階上のプレゼンテーションを目指したいと考えている。

## 5. 課外活動—Conversation PartnerとEnglish Table

SSEPの課外活動として、conversation partner制度とEnglish tableがある。どちらも、授業時間以外で英語を話す機会を増やすことを目的に考えられた活動である。両者で大きく違う点は、conversation partnerが米国研修中の課外活動であるのに対し、English tableは研修出発前と帰国後に静岡で行う活動であるということにある。

まずconversation partnerだが、これは1週間に6時間相当を、研修の間1対1と一緒に過ごしてくれる英語母語話者のことを言う。研修初年度から導入している制度で、希望者は研修申し込み時に一緒に申し込むことになっている<sup>11)</sup>。Conversation partnerはオハイオの担当者により募集され、学生とのマッチングが行われる。主にオハイオ州立大学の学生・関係者や、大学近辺の社会人が応募してきているようであるが、一度マッチングが行われれば、あとは当人同士が連絡を取り合い、どこでどのように会って話をするかは各人の判断に任されることになる。

前述したとおり、希望者のみが対象であったが、過去3年間参加者の全員がこの制度を利用した。しかし3年の間には、こちらが期待していた効果が見られなかったり、逆に学生側から不満があがったりと、試行錯誤の中で確立していった制度であった。特に初年度(2003年)は、全てが手探りの中で計画されたこともあり、必ずしも学生

10) ビデオテープに収録。

11) Conversation partnerを希望する参加者は、別途料金が発生する。

## 報告書

にとって満足度の高いものにはならなかった。研修終了時のアンケート調査からは、評価の高いコメントに混じって、「conversation partnerとの年齢差が大きすぎた」、「同性の相手の方が良かった」、「相手との共通点や話題を見つけるのに苦労した」等の不満も散見された。中には、研修途中でconversation partnerを新しくマッチングし直す学生もいた。

このような不満を生んだ原因として、参加者がconversation partnerに望むことを、早い段階で担当者が把握できなかったことが挙げられる。この反省点を活かし、翌年度は、conversation partnerの申込時に性別と年齢（同年代を希望するか、特に希望がないか）についての要望を付記できるようにオハイオの担当者が配慮し、さらに県立大では、要望に添ったマッチングがスムーズになされるよう、なるべく早い段階での申込書送付を行った。その結果、2年目の2004年プログラムでは、初年度を大きく上回る高い評価がconversation partner制度に寄せられた。しかし、ごく少数ではあったが、「相手と現地でコンタクトがとりづらかった」、「最初に要望したのとは違う相手の方が良かった」等の不満も見られた。

3年目の2005年にはさらに一歩進めて、出発前のオリエンテーションの時にconversation partnerの意義について詳しい説明を行うようにした。また、研修開始後は、前年度の「相手とのコンタクトがとりづらかった」という不満を踏まえ、オハイオの担当者が早い時点で参加者とconversation partnerの引き合わせ会を計画し、当人同士が会って話す最初の機会を設けた。このような努力により、この年はconversation partnerに対する不満はほぼなくなり、研修終了時にはこれまでになく高い評価のコメントが得られた。SSEP全体として、このconversation partnerを最大の魅力の一つとして挙げていた参加者も何人かいたほどである。

このように、初年度はいくつか課題が残るconversation partner制度ではあったが、参加者からのフィードバックをもとに毎年改善を重ねた結果、満足度の高いものに変えていくことができた。今後の課題は、参加者がいかに積極的にconversation partnerと接触をしていくことができるかであろう。これまでの経験から、参加者が相手に過度の期待を寄せたり依存しすぎたりすると、歯車が少し狂ったときに大きなストレスが生まれやすいということがあるようだ。また、当人同士のコミュニケーションを全て参加者の自主性に任せていると、県立大の学生としてはどうしても気後れがして、最初の連絡がなかなかできないということも観察された。そこで、最初の引き合わせを担当者の方でやや強引にセットアップすることで、参加者は否が応でも相手と対話せざるを得なくなり、その後のスケジュール調整もスムーズに行われるという

効果が得られた。本来ならば、参加者本人が最初から積極的に相手に接触をして、何か小さな問題があれば適宜解決をしていく姿勢が望まれるところなので、このようなスタッフ側の手取り足取りのサポートは必ずしも理想的とは言えない。しかし、conversation partnerというせっきくの制度を有効に活用してもらうためにも、担当者としての必要なサポートは続けつつ、その一方で参加者には積極的行動を促すような取り組みを今後も行っていきたいと考えている。

次にEnglish tableについて述べる。これは研修出発前と帰国後に静岡（県立大学内）で行うもので、3年目の2005年度から始まったばかりの試みである。初年度と2年目の経験から、3週間という短い研修期間でいかに積極的に英語を使うことができるかが、参加者にとって一つの課題であった。この課題に取り組むためには、米国に到着して初めて日本語から英語への気持ちの切り替えを行っていたのでは遅く、むしろ日本を出発する前から、英語の環境を想定したイメージトレーニングが不可欠であると考えた。そこで、希望者を対象に、週に何度か集まってもらい、担当教員とともに英語で話をする機会を設定したのである。担当教員も含めて参加者は全て日本語母語話者であったが、日本人同士で英語を使って意思疎通することに対する違和感を少しでも取り払ってもらおうという狙いも含まれていた。

この試みに参加したのは、2005年の参加者14人のうち12人であった。出発前の活動として、6月中旬から7月中旬にかけて計10回にわたりセッションがもたれた。1回の平均参加人数は3、4人であった。帰国後の活動は、11月から12月初旬にかけて5回開催された。会話のトピックには、語学研修に応募した動機から、授業やアルバイトといった、身近なものなどが選ばれ、なるべく気軽に参加してもらえるような雰囲気作りに努めた。

研修後の聞き取り調査から得られた参加者の感想は、おおむね良好であった。具体的な例を挙げると、「アメリカに発つ前に予行練習ができて良かった」、「毎週英語で話す機会を持つことでモチベーションを高く維持できた」や、「事前に参加者と顔なじみになれた」といったものから、「思っていたほど自分が英語でしゃべれないことを事前に確認できた」というものに至るまで、こちらが当初意図していた以外の効果も見られた。

しかしその一方で、来年以降への課題もまた残している。例えば、参加者の一人から「日常会話の練習にはなったが、英語で口頭発表をする練習にはならなかった」というコメントを得た。つまり、あるテーマについて、自分の意見をまとまった形で発表する時に必要な英語力は、日常会話を楽しむために必要な英語力とは性質が異なる

## 報告書

ので、目的に応じた事前準備が望ましいということであった。まさにその通りであろう。このような、日常会話のための伝達言語能力と授業の課題遂行に必要な学力言語能力 (academic communicative proficiency)<sup>12)</sup> の違いは、習得にかかる時間も異なるので、第二言語で通常の授業を受ける際には特に留意されるべき問題である (Cummins 1981, 1984, 中島 2002)。

学力言語能力を研修前の活動で高めるためには、適切なテーマに沿って意見をまとめ、発表練習を行うメニューをEnglish tableに組み込む必要がでてくる。しかしそうなると、誰でも参加できる身近な英語練習の場所から、ある程度の動機付けがないと参加しにくい、敷居の高いものへと、活動の性質が変わってくることになるかも知れない。そうなった場合、今年度見られたような高い参加率は望めなくなるだろう。また、学力言語能力は一朝一夕に身につくものではないので、研修の出発前にその力を高めるといっても、English tableも含めた研修全体を通して学習を促していくことが大切だとも考えられる。

このように、2005年から始まったEnglish tableは、おおむねの成功を見ながらも、その具体的な方法については改良の必要性を残していると言えるだろう。今後は、conversation partner制度が年を追う毎に充実したものに変わっていったように、English tableもまた、さらなる工夫を加えながら、参加学生の満足度と学習効果を一層あげるものにしていきたいと考えている。

## 6. 学生のアンケート調査結果から

SSEPのこれからの発展を考える上で、参加者からのフィードバックは不可欠の情報である。特に、SSEPがオンデマンド海外語学研修プログラムである点から、参加者の生の声を今後の取り組みの中に十分に反映していくことが必要である。ここでは、2003年と2005年に実施したアンケート結果の一部を紹介して、学生の満足度を上げるためのヒントを探してみたい。

まず、2003年のアンケートは研修終了直後、オハイオ州立大学の担当者が作成した質問に英語で答えるという形で行われた。研修の評価に関連する質問に対する学生の回答は以下の通りであった。たとえば、「あなたは、研修期間中に自分がやろうと思っていたことがすべてできましたか？もしそうでないならその理由は何だと思えますか？」

---

12) 「アカデミックコミュニケーション能力」と同義語。

という全体的な成果を尋ねる問いに対して、「ほとんど達成できた」、「アメリカの文化を体験しようと思っていた目標が達成され、うれしい」を初めとして、全般的に肯定的な回答が多かった。また、達成できなかったこととして発話やスピーキング能力の向上をあげている学生が複数いた。

また、オハイオ研修の大きな特徴である resident assistance と conversation partner のサービスについての問いに関する回答をみてみよう。resident assistance については、「良いサービス。大変役立った」、「よく面倒をみてもらった。人柄の良さが伝わってきた」とほぼ全面的に支持や感謝が述べられていた。一方、conversation partner については、「とても良いサービス。生活全般の面倒をみてもらった」、「人前では話せなかったが、conversation partner には話せた」など、サービス自体については肯定的な返答が多かった。ただ、conversation partner と個人的にうまくいかなかった学生からは「conversation partner とはうまくいかなかった。せめて年齢が近かったらよかった。性別についても配慮が欲しい」のような今後へのアドバイスも寄せられた。この点については翌年度から改善がおこなわれたのは前述の通りである。2005年のインタビュー結果を見ると、conversation partner への不満はほとんどなく、研修生活への満足度も上がっているようにみうけられる。研修制度やプログラム内容もちろん重要であるが、慣れない土地で生活を始めることを考えると、研修の成功は resident assistance や conversation partner のようなサービスと学生たちと直接関わるスタッフの人的魅力に負うところが大きいように思われる。それは学生たちが寄せた「このプログラムの長所、短所は？」という問いへの回答にも現れていた。長所として、「面倒見が良い。特に海外に行った経験のない学生は助かる」、「勉強以外の経験が多く積める」、「conversation partner のサービスをはじめとしてスタッフが良かった」などを多くの学生が挙げた。他方、前述したように、2003年は寮の手配が遅かったため、「寮が汚かった。キッチンも欲しい」などの不満の声もあった<sup>13)</sup>。こうした、学生の生活上の改善は、今後の発展のためにも、さらに受け入れ側と相談を密にしていくべき重要な事項となろう。

次に、2005年の研修に参加した学生たちの声をきいてみよう。これは研修開始2週間後に筆者の一人が行ったインタビューに基づくものである。インタビューは、以下の5項目であった。それぞれの項目に対する学生たちの典型的な回答をまとめてみよ

---

13) この経験を踏まえて、翌年度からは寮の申し込みを早めに行うことによって、このような寮の問題は解消できたようである。

## 報告書

う。まず、「オハイオ州立大学」については、「広い。アメリカの大学の雰囲気味わえてよかった」を始めとして、ほとんどの学生がまず景観の違いに圧倒されるようである。そして、それを否定的にとらえている学生は一人もいなかった。おおらかなキャンパスはアメリカでの異文化体験の入り口に向いているようである。続いて「人間関係」では、「みんな良い方。先輩達とも仲良くなれてうれしい」など、普段とは異なる人間関係を楽しんでいるようである。また、conversation partnerについても「趣味が同じで親交が深まった」、「オハイオの方を選んだのはconversation partner制度があったから」等否定的な感想は聞かれなかった。この点に関しては、2003年の調査の時に比べ著しく好転している。2004年からの改善策が功を奏しているように見える。「キャンパスの外」という項目では、「ファースト・フードは重くてたいへんなので、スーパーで買って食べている」、「なんとか自炊しようとしている」など、食事に関するコメントに偏っている。生活に最も近い部分への印象は短期留学に対する学生たちの評価に関連しているのかもしれない。

さらに、「プログラム・授業・リクエスト」という、研修の中核をなす質問に対しては、2003年度の回答に比べると、具体的な評価、分析をした上で、意欲的な提案ができて回答が目立った。留学への意識の高まりが窺える。たとえば、「〇〇講師の授業は面白い」、「ゲストレクチャーは回によって内容、面白さにばらつきがある」、「ゲストレクチャーは前もって内容を教えてくれたら予習ができるのに」、「こちらでしかできないような形態の授業（ディスカッション中心）をもっと増やしてほしい」、「意見を述べたり質問をしたりするタイミングがよくわからない、理解はできるが言葉が口から出てこない」、「アウトプットが重要」、「ホームステイがリスニング向上のターニングポイントとなった」などが複数の学生から挙げられたコメントであった。英語の技能面からみると、学生たちはリスニングに不安を抱えてスタートし、スピーキングに今後の課題を感じたようである。

最後に、「渡米前との印象の違い・2週間後の自分の姿」という項目には、「思ったより話せていない。ただ、これからは調査ための質問があるので、もっと流暢に話せるようにしたい」、「『何を言うか』に加えて『どう言うか』についても気にするようになった」、「もう少し文法事項に注意を払って話せるようになりたい」、「アメリカについての見方が変わった」など反応はさまざまであったが、すべての経験を前向きに捉えて自分自身を変えて行こうとする姿勢が多くみられたのが印象的であった。

このように、2003年に開始したSSEPはオンデマンド短期海外英語研修プログラムという、日本の大学レベルではこれまでにない試みであったため、当初は手探り状態

でいろいろと問題が生じた。しかしながら、参加学生の意見・要望に積極的に耳を傾け、またプログラムの内容や運営についてオハイオ州立大学担当者と協議を重ねながら、少しずつ改善を施して来たことで、徐々にではあるが、SSEPはオンデマンド語学研修として理想とする姿になりつつあるといえる。特に、上記の2005年でのアンケート調査結果を見ると、将来に向けての展望は開けているように思われる。

#### 参考文献

- Cummins, J. (1981). The role of primary language development in promoting educational success for language minority students. In California State Department of Education (ed.). *Schooling and language minority students: A theoretical framework*. Los Angeles, CA: California State Department of Education.
- Cummins, J. (1984). *Bilingualism and special education: Issues in assessment and pedagogy*. Tonowanda, NY: Multilingual Matters.
- 中島和子. (2002). バイリンガル児の言語能力評価の観点—会話能力テストOBC開発を中心に. 国立国語研究所編, 『多言語環境にある子どもの言語能力の評価』(日本語教育ブックレット1).